

萬葉集東歌に於ける「かなし」の独自性にふれて

河野 頼人

萬葉集東歌（小稿では卷二十の防人）の「かなし」について考へてみたいのであるが、小稿ではその「かなし」が萬葉集中に占める独自性に些かふれてみたいと思ふ。

東歌に「かなし」といふ感情語が多用されてゐることは周知のとであるが、これを表示すれば、

語	東歌	防人	計	その他
かなし	26	9	35	56
まかなし	3	2	5	1
うらがなし	1		1	6
ものがなし				2
まうらがなし				1
ころがなし				1

備考

- ・「萬葉集総索引」によつて検索した。
- ・「その他」は、東歌防人歌以外をいふ。
- ・「その他」の「かなし」五六例中には、3の四三四の「或云」、5の八九〇の「一云」の例も数へてある。

総計	計	おもひがなし
109例 (105首)	30	
	11	
	41例 (37首)	
	68例 (68首)	1

となる。東歌の四一例は、卷十四の二三八首、卷二十の防人歌九三首（うち長歌一首）計三三一首に於けるもので比は12%。東歌以外のその他を概算四二〇首としてみた時の1.2%強と比較して注意される数であると思ふ。

そして「かなし」の意義に「愛し」「悲し」の二つのあることはよく知られてゐるのであるが、伊藤博士が、「愛し」は卷四・七・九・十八にそれぞれ一例あるだけで「東国特有の語であるといつてよいのである。」（「萬葉集相聞」）と述べてをられるやうに、東歌にあってはその用例の殆んどが「愛し」に解され、その他にあつ

ては少数を除いて「悲し」である（猶私の計算によれば「愛し」は伊藤氏より三例ばかり増えると思ふ）。東歌には「愛し」の世界がその他に於ける「悲し」の世界と対照的に表はれてゐるといへるが、「愛し」と「悲し」の違ひはどうかしたところにあるのであろうか。

中川徳之助氏は、「萬葉集の現実感情」といふ主題のもとに東歌をとりあげそこにみられる「かなし」の感情を考察された中に、

「『悲し』の情というのは、対象（単に対者ではなく自己自身）に流れる愛心が障礙の意識をもつところに生ずる感情であると思ふ。これに対して『愛し』の情は障礙の意識をもたないところに生ずる感情であらうか。それでは『愛し』の情はあまりに穏やかであり、弱い。私は『愛』の情というのは対象に流れる愛心が充足の意識をもつところに生ずる感情であると思ふ。」

（二一頁、「文学探究」第二卷第二号）
（昭和二年三月。四角は原文のまま）
と説いてをられる。「悲し」を「愛心が障礙の意識を」、「愛し」を「愛心が充足の意識を」持つところに生ずる感情であると、表現内容・表現主体の心意に即して規定されてゐる点には教へられることが多い。しかし麴引きつづき、「感情内容に立ちいたると二つの情は常にからみあい融けあつてゐる。『哀し』『憐し』等という言葉も、その微妙な感情の翳りに形象されたものとも述べてをられるやうに、微妙なところになれば鑑賞者の主観的判断によりかからねばならぬともいへる（註一）。

そこで、中川氏の御論致に導かれつつ、小稿では視点を主として表現形式・用語に置いて考へてみたいと思ふ。

先づ東歌に於ける「かなし」の対象を整理してみる。例外の四例

を除いて、男が女を「かなし」とするもの、

筑波嶺に雪かも降らるる否をかも加奈思吉児ろが布乾さるかも
（三五二）

赤見山草根刈り除け逢はすがへあらそふ妹しあやに可奈之も
（四七六）

苗代の子水葱が花を衣に摺り馴るるまにまた何か加奈思家
（五七六）

及び、女が男を「かなし」とするもの、

多由比瀉潮満ちわたる何處ゆかも加奈之伎背るが吾がり通はむ
（五四九）

あぢかまの瀉に咲く波平瀬にも紐解くものか加奈思家を置きて
（一四の三五五一、『日本古典文学大系萬葉集』による）

との二つに分類することが出来るのであるが、これらは男と女の違ひこそあれそれぞれ「かなし」の対象となるものは異性——「他」にあるのであるから、一つにまとめることが出来る。そしてこの「かなし」は「愛し」と解釈出来るものである。

例外の四例とは、

吾が戀は現在も可奈思草枕多胡の入野の将来も可奈思も
（一四の三）
（四〇三）

たたりめり
麴牟良自が磯の離磯の母を離れて行くが加奈之佐
（二〇の四三三八、）
（生部道隆）

厭なる細絶つ駒の後るがへ妹が言ひしを置きて加奈之も

障へなへぬ命にあればかなし妹が手枕離れあやに可奈之も

(20の四四二九、)
昔年防人歌

(20の四四三二、)
昔年防歌

であるが、この「かなし」の対象は異性にはなく、自己の心中そのものを述べたものである。そしてこれらは「悲し」と解釈出来るのではなからうか。即ち、三四〇三は「吾が」と歌ひ出してゐるが、『蕙葉集私注』には「はれるやうに、対句や序詞からみても上野国多胡郡の風土に成立した民謡と考へられ、「常に悲しく、未もたのみ難い恋愛といふ、これも亦一つの社会的経験を融合して一首としたもので」あり、「カナシは愛しとも考へられるが、寧ろ今の『切ない』にあたるのであろう。(十四の七九)といふ解釈に従ひたい。四三三八、四四二九は、母や妹との別離を悲しむ防人の気持が「かなし」と表出されてゐる。四四三二は、拒むことの出来ぬ勅命故に「かなし妹」の手枕を離れて行く防人の気持が、今はどうしやうもない運命の嘆きの表出として「かなし」を用ゐてゐる。

このやうにみれば、右の四例を除けば東歌に於ける「かなし」は「愛し」であり、「かなし妹(背)」の類型を有してゐることがいへる。そしてここで併せて述べておきたいことは、既に野上久人氏も指摘してをられるのであるが、東歌の中には「寝る」といふ感覺的表現の語が多い。野上氏は、「民謡的な古代の民謡を母胎としてゐるため、おのずと男女交歓の歌が多し」い為であると説いてをられるのであるが(「東歌」その抒情性——一九三頁、)———その他の「かなし」が「寝る」を伴つてゐる例はない——、「かなし妹(背)」が「寝る」と結びついてゐる例をあげると、

麻可奈思美寝らくはしけらくき鳴らくは伊豆の高嶺の鳴澤なすよ
(14の三三五)
八或本歌

麻可奈思美寝れば言に出さ寝なへば心の緒ろに乗りて可奈思も
(14の三三六)

麻可奈思美寝れば言に出さ寝なへば心の緒ろに乗りて可奈思も
(14の三四六)

とこの三例は「まかなし」——「寝る」の類型をとり、又巻十四の三四六五、三五五六、三五七七は「かなし」が「寝る」を伴ふ。このことは、「かなし妹(背)」に於ける「かなし」がかなり概念化された「愛し」であり、且つ恋愛に通ふ面の多分であることを示してゐるといへるかと思ふのである。そして同時に、その「愛し」の内容について全般的に個体差に乏しいことが印象づけられる点を指摘しておきたい。

これに對しその他に於ける「かなし」は、

わが御門千代永久に榮えむと思ひてありしわれし悲も
(2の一八三、日)

わが背子に戀ひすべなかり葺垣の外になげかふ吾し可奈思も
(17の三九七五、)

……年の緒長く 思ひ来し 恋を盡さむ
(10の二)

七月の 七日の夕は われも悲も(〇八九)

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲も独りしおもへば
(19の四二九二、)

(大伴家持)

朝つとに行く雁の鳴く音はわが如くもの思へかも声かなしきの悲

(10の二)
(一三七)

等と、「われ」「ひとり」と自己の心中を「かなし」と発想してゐる点に注意したい。これは既掲の東歌の「かなし妹(背)」の類型からはづれた四首に通ふものであり、東歌の「かなし」を他愛の世界に於けるそれとしてとらへるとすれば、ここには「かなし」が自らを悲傷する為に用ゐられ、自悲の世界があるといふことが出来はしないか(註2)。

即ち、一八三は挽歌である。三九七五は夫と離れ恋のせつなさを歌ふ女の情が、自己の体験そのものとして描かれてゐる。二〇八九は七夕の夜を「われも」と同情してゐる。それは「かなし」と詠じた作者の感傷的な姿勢でもある。そして二一三七は、雁の声を「かなし」と聞いたのであるが、それは「わが如くもの思へかも」といふ条件のもとにとらへられたものである。それから「独り」を詠じた家持の歌について、岡部政裕氏は、

「家持は貴族社会における榮達を願ったが、それは単に個人の榮達ではなく、衰運に向かった家門の挽回を求めたのであった。しかし、彼は複雑な政治情勢を見通す能力に恵まれていなかった。

従つて、行動への意志決定もできなかった。……『ひとり』の意識は、社会から孤立したところで始まったにちがいないが、自分から始まったとも言えよう。どこから来たかもさだかでなく、どこへ向けてもよいかもわからない憂悶と悲愁。……」

(「『ひとり』の系譜——赤人から家持へ——」五四—五頁)、「上代文学研究と資料——萬葉集を中心に——」

憂悶と悲愁であると考へることが出来るのである。

今私は自悲といふことをいつたのであるが、これら「かなし」は、自己の心中を描くところに用ゐられてゐる。その他に於ける「かなし」は、自悲の世界に於いて概ね把握することが出来るのであり、そしてそれはそれぞれに於いて悲愁であり感傷であり憂悶であり慟哭であり、個体差をみせて描かれてゐるのである。

そして四二九二「獨りしおもへば」とあつたのであるが、その他にあつては「かなし」が所謂条件法を受けて発想されてゐる例が目立つ。例へば、

朝鴉カナシ早くな鳴きそわが背子が朝明の姿見れば悲カナシも(12の三)
真幸くと言ひてしものを白雲に立ち棚引くと聞けば可奈思も(〇九五)

(17の三九五八、)
大伴家持

人の親の少女をとめ児握とらえて茂る山辺から朝な朝な通ひし君が来ねば哀カナシ

(11の二三六〇、)
柿本人麿歌集

等であるが、この条件法を伴つた歌は六八首中三四首で丁度半分を占めてゐるのであり、東歌に於ける条件法が四例のみであることよりみれば、一つの特徴といふことが出来ると思ふ。そして東歌に於けるそれは、

麻可奈思マカナシ美寝れば言ことに出さ寝なへば心の緒いとに乗りて可奈思も

(14の三)
(四六六)

潮船しほぶねの置かれば可奈之マカナシ寝つれば人言ひとことしげし汝きを何かも爲なむ

(14の三)
(五五六)

置きて行かば妹いもば麻可奈之マカナシ持もちて行く梓ついでの弓ゆみの弓東ゆかにもがも

と、対句を用ゐる且つ「寝る」ことをいひ、或いは類歌も多い(五六七) (14の三) (後述)

民謡的色彩の濃い常套的発想である。残る一例卷二十四の四三八七の防人大田部足人の歌が条件法によつて「かなし」の内容を深めてあるものを除いては、内容の具体化されたものはない。民謡の世界へ解消するものといへるであらう。他愛の「かなし」は理窟を抜きにした一般的概念の共通理解の世界にあり、これに対し自悲にあっては何故「かなし」いのか自らに規定する。その場合条件法が「かなし」を具体化し個別化してゐるといへるのではなからうか。このことは、東歌の「かなし」に条件法が乏しく且つ「かなし妹(背)」の類型でまとめられるやうに概念化された「かなし」であることと相対してゐる。換言すれば、東歌の他愛の「かなし」の類型性概念性を際立たせてゐるといふことが出来ると思ふ。

さて上來東歌に於ける「かなし」の持つ概念性について述べて来たのであったが、概念性とは猶同時に次の如き類歌性をその背景に持つものであることを指摘したいと思ふ。類歌性については、

「一般に和歌文学には、二首または二首以上の間に、一部分が相違して大部分が共通である関係(仮りに少異歌と呼ぶ)と、反対に一部分が共通で大部分が相違する関係(同様、類歌又は類句歌と呼ぶ)とが屢々見出されるが、こうした関係を一括して普通類歌性と呼んでいる。……」(高木市之助氏「解説」、『日本古典文学大系萬葉集三』一一頁)

A 筑波嶺に雪かも降らる否をかも加奈思吉兒るが布乾さるかも

(14の三)
(三五二)

相見ては千歳や去ぬる否をかもわれや然思ふ君待ちがてに

(11の二)
(五三九)

二五三九は卷十四の三四七〇に「人麻呂歌集出也」とあり重出してゐる。Aの歌、二五三九(三四七〇)と発想を同じうしてゐるとはいへないと思ふが、「否をかも」に注意した(例で金)。しかし木下正俊氏もいはれるやうに(「筑波嶺に雪かも降らる」、十)、何ではない、何でもなければ何でもないと言を否定するもの、自問自答式で後句を強調するのは、後世まで長く続く民謡の有力な一型式である。木下氏の御論攷からもAの民謡性を説明する例を引用しておく。

甲斐が嶺に 白きは雪かや いなをさの 甲斐の蓑衣や 晒す手
作りや 晒す手作り(風俗歌「甲斐が嶺」)

よしのやまをゆきかと思れば、ゆきではあらで、やあこれの、
はなのぶきよの、やあこれの(松小)

東山のは雪ではないか、あれが雪かや櫻花(山歌鳥)

B 麻可奈思美寝らくはしけらくき鳴らくは伊豆の高嶺の鳴澤なす
よ(14の三三五)
(八或本歌)

さ寝らくは玉の緒ばかり戀ふらくは富士の高嶺の鳴澤の如

(14の三)
(三五八)

逢へらくは玉の緒しけや戀ふらくは富士の高嶺に降る雪なすも

(14の三三五)
(八一本歌)

右はそれぞれBの本歌及び一本歌。譬喩表現の部分に多くの類歌を有してゐる。

吾妹子に逢ふ縁を無み駿河なる不盡の高嶺の燃えつつかあらむ

(11の二)
(六九五)

妹が名もわが名も立たば惜しみこそ布士の高嶺の燃えつつ渡れ

(11の二)
(六九七)

君が名もわが名も立たば惜しみこそ不盡の高嶺の燃えつつも居れ

(11の二)
(九七或歌)

そして沢瀉久孝氏『萬葉集注釋』に、

あふことは玉のをばかり名の立つはよし野の河のたぎつせのごと

(古今集13、よ)
(み人しらず)

はBらによって生れたもので、類歌がいろいろに伝誦されたものと

ある(十四の)
(三〇頁)。

C麻可奈思美さ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満つなむか

(14の三)
(三六六)

悔しくも満ちぬる潮か住吉の岸の浦廻ゆ行かましものを

(7の一)
(一四四)

川や浦を渡渉して女のもとに通ふといふところに風土に即した一種の趣向が感じられ、民謡的気分が豊かである。そして、

多由比瀧潮満ちわたる何処ゆかも加奈之伎背ろが吾がり通はむ

(14の三)
(五四九)

はCを女の立場から歌つたものといへる。

D左奈都良の岡に粟蒔き可奈之伎が駒はたぐとも吾はそも追は
じ(14の三)
(四五一)

足柄の箱根の山に粟蒔きて矢とはなれるを逢はなくもあやし

(14の三)
(三六四)

この二首は上句の発想が共通してゐる。そして三三六四の「粟」については、

「粟と逢フとの同音を利用して軽くしゃれている歌である。民謡として軽く歌われていたのだから。粟をまくことに逢おうとする意をかけているのは(例歌略、3) ……などがあり、古人の

好んだしゃれの一つである。」(武田祐吉氏『萬葉集全』)

とある。

E高麗錦紐解き放けて寝るが上に何ど爲ろとかもあやに可奈之伎

(14の三)
(四六五)

高麗錦紐解き交し天人の妻問ふ夕ぞわれも憊はむ

(10の二)
(〇九〇)

垣はなす人は言へども高麗錦紐解き開けし君にあらなくに

(11の二)
(四〇五)

高麗錦紐解き開けて夕だに知らざる命戀ひつつかあらむ

(11の二)
(四〇六)

高麗錦紐の結びも解き放けず齧ひて待てどしるし無きかも

(12の二)
(九七五)

「高麗錦」は、一般庶民には手の届かぬ貴重な品物として憧憬を伴って流布した語であらう。そして作者未詳の巻にあって、「紐を解く」といふ語をおこし枕詞のやうに固定化がみられる。折口信夫氏の「都の流行を遙くまで語句の上に保存してゐた」(『東歌疏』、集十三の)といはれるやうに、根強く民謡の世界に残った語であるともいへる。又「あどせろ」と、命令形に「ろ」のついた形も東歌の方言的世界であるといふことが出来る。

F 麻可奈思美寝れば言に出さ寝なへば心の緒ろに乗りて可奈思も
 春さればしだり柳のとををにも妹は心に乗りけるかも
 (10の一八九六、)
 (人麻呂歌集)

宇治川の瀬瀬のしき波しくしくに妹は心に乗りけるかも
 (11の二四二七、)
 (人麻呂歌集)

大船に葦荷刈り積みしみみにも妹は心に乗りけるかも
 (11の二四二七、)
 (人麻呂歌集)

驛路に引舟渡し直乘に妹は心に乗りけるかも
 (11の二四二七、)
 (人麻呂歌集)

漁りする海人の楫の音ゆくらかに妹は心に乗りけるかも
 (12の三)
 (一七四)

白雲の絶えにし妹を何爲ると心に乗りて許多可那之家
 (14の三)
 (一五七)

近い。そして「さ寝なへば」「あどせろ」等の東国語が東国民謡らしい息吹きを伝へてゐる。家持の歌(4の六九)はこれらを学んだのであらう。

G 大君の命長み可奈之妹が手枕離れ夜立ち來のかも
 (14の三八〇)
 障へなへぬ命にあれば可奈之妹が手枕離れあやに可奈之も
 (20の四四三二、)
 (昔年防人歌)

H 白雲の絶えにし妹を何爲ると心に乗りて許多可那之家
 (14の三)
 (一五七)

F 参照。
 I 棚越しに麥食む小馬のはつはつに相見し子らしあやに可奈思も
 (14の三五三)
 (五三七)

J 馬棚越し麥食む駒のはつはつに新膚觸れし児ろし可奈思も
 (14の三五三)
 (七或本歌)

この山の黄葉が下の花をわがはつはつに見てなほ戀ひにけり
 (7の一三〇六)
 (人麻呂歌集)

白袴の袖をはつはつ見しからに斯かる戀をもわれはするかも
 (11の二四一一、)
 (人麻呂歌集)

山の端にさし出づる月のはつはつに妹をそ見つる戀しきまで
 (11の二四六一、)
 (人麻呂歌集)

馬棚越しに麥食む駒の冒らゆれどなほし戀しく思ひかねつも
 (12の三)
 (〇九六)

猶、「河内百枝娘子贈大伴宿禰家持」歌(4の七〇)は右の歌等を学んだものと思はれる。

K 多由比瀉潮満ちわたる何處ゆかも加奈之伎背ろが吾がり通はむ (14の三)

(五四九)

C 参照。

L 置きて行かば妹は麻可奈之持ちて行く梓の弓の弓束にもがも (14の三)

(五六七)

吾妹子は劍にあらなむ左手のわが奥の手に纏きて去なましを (9の一七六)

(六、振田向)

わが背子は玉にもがもな手に巻きて見つつ行かむを置きて行かば惜し (17の三九九)

(〇17、大伴家持)

父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧ごて行かむ (20の四三二五)

(丈部黒当)

母刀自も玉にもがもや頂きて角髪の中にあへ纏かまくも (20の四三七七)

(津守小黑栖)

M 可奈思妹を何處行かめと山菅の背向に寝しく今し悔しも (14の三)

(五七七)

わが背子を何處行かめときき竹の背向に寝しく今し悔しも (7の一)

(四一二)

情としては一四一二のやうに女の歌とする方が感動が深いと思ふ。Mはその異伝として流布したものであらう (猶、その他に於ける「かなし」の類)

歌を概観したところを示すと、13の三三三七と三三三〇八三三三七の少異歌Vを15の三六九二の葛井子老が学んだ例、及び7の一三三八について2の一三三〇の人麻呂、9の一六九〇の人麻呂集との類関係が指摘されるのが主なものである。一つの傾向として東歌の類歌

れと対比してみるこゝとが出来てあらう。

さて以上はA、Mの各歌について類歌性に關はるものを指摘したのであるが、この分布をみると、

歌番号	卷七	卷十	卷十一	卷十二	卷十三	卷十四	卷二十	
A3351			△			△		
B3358 或本歌			〇〇〇			〇〇		
C3366	〇					〇(K)		
D3451						〇		
E3465		〇	〇〇	〇				
F3466	〇〇	〇	〇〇〇	〇	〇	〇(H)		
G3480							〇(昔年防人歌)	
H3517	(F参照)							
I3537			〇〇	〇				
J3537 或本歌	〇							
K3549	(C参照)							
M3577	〇							
L3567		〇(振田向9の1766) 〇(家持17の3990)						〇(防人歌) 〇(防人歌)

と、卷七・十・十一・十二・十三及び東歌の範圍に於いてのみ類歌備考・〇△はそれぞれ歌一首を示す。〇は類歌を、△は参考歌を示してゐる。

を指摘することが出来る。F・I・Jに於ける巻四の家持関係の歌各一首は模倣歌とみられるものであつて次元を異にしてゐるとして除くことが出来る。唯一の例外はLであるが、もとより実現する筈のないことを願ふ切情は、家持の「わが背子は玉にもがもな」も防人の「母刀自も玉にもがもや」も何らその間に差はみられない。これら発想には既によりかかるべき共通の民謡があつたともいへるし、又人間共通の心理が類型を育てたと考へられる。

如上のやうにみて来れば、「かなし」を有する東歌は、すべて作者未詳歌の中に於いてのみその類歌性を主張してゐるといへよう。この類歌性をどのやうに理解したらいいか。

「類歌性とは、……個人差を基本とする、其の創作過程と矛盾してこれを拒もうとする。……裏から言つて、これらの巻々（私云、巻七・十）に特て顯著に認められる類歌性とは畢竟個性少くとも個別的な性格と対決することによつて、その一つの現われともいへべき作者名に挑むものなのである。」（前掲書、頁二）

と高木氏は説かれる。氏は別の御論致に於いて、「類歌性を短歌の一つの古代性として観よう」（「短歌の古代性」、『古』ともいはれてゐるのであるが、今この類歌性を、個性に挑む——「それ自體の中に個々の作者を拒むような性格」（高木）——を認めることが出来るといふ点に於いて把握したいのである。

それならば、東歌の「かなし」はかうした作者未詳歌の世界そのものであらうか。

類歌性を求めて気がつくことは、東歌の「かなし」を含む歌の類

歌には「かなし」の語がないといふことである。そして既述したことであるが、作者未詳歌の「かなし」は他愛のそれではなかつた。このことはやはり他愛の「かなし」といふ感情語は東歌独自のものであり、作者未詳歌の中にあつて猶その独自性を示す一特徴といふことが出来ると思ふのであるが、その独自性はどういふところに育てられて来るのであらうか。私はこの点、同じく高木氏が、東歌について、

「作者不明歌は、……巻十・十一・十二などの所収歌から、東歌へ溯ることによつて、東国という地方的な風土と社会に媒介されて、本来の性格つまり非個性的集團歌即ち民謡の性格を一層はつきりさせて行つたと見るべきであらう。」（前掲書）と述べてをられることをお借りして考へてみたいのであるが、さて、東歌に於ける「東国という地方的な風土と社会」とは一体どういふものと把握すればよいであらうか。

例へば既に掲げたことであるが、「まかなし」といふ形で表はれてゐる例は五例あるが、そのうち三例が第一句に「まかなし」とおき「寝る」ことをいってゐる。「寝る」といふ語が何も東歌特有のものでないこと勿論であるが、しかし「まかなし」——「寝る」といふ性愛表現の類型は、その他には類がなく、私には東歌の世界そのもののやうに思はれる。

このやうな意味に於いては「かなし」の歌にみられる「寝る」は東国の風土性を背負つてゐるといへる。いひかへれば、他愛の「かなし」はかうした風土性を背負にしてゐるのであるといへよう。そこで風土性を説明する方法として孤語について考へてみたい。孤語とは、高木氏の御論致「孤語」（『文学・語学』第二）に導かれてゐるのであるが、小稿に於けるそれは、東歌のみに使用されてゐる

語——さしあたっては「かなし」を含む歌に於いて——を孤語としてとらへ、その発想の背景たる風土性を明らかにしたい。ただし固有名詞や音韻転訛によるものは指摘しない。先づ孤語をあげていく。

○鳴瀬

鳴瀬なるとに木屑こづつの寄すなすいとこのきて可奈思家背ろに人さへ寄すなると（五三八）

「鳴瀬」は音を立てて洗れる川の瀬。古今集にもない孤語である。

○潮船

潮船うしほふねの置かれば可奈之さ寝つれば人言しげし汝なを何かも爲しむな（五五六）

潮船の置かれば可奈之さ寝つれば人言しげし汝を何かも爲む（五五六）

「潮船の」は枕詞。中西進氏は、

「『潮舟』なる語（2014・三四五〇、三五五六、）は常陸・下総らの庶民によって詠まれ、……何れも歌語としては東国の歌にしか登場しない。萬葉集のみならず王朝以後の和歌を瞥見しても一寸見当らぬ語で、東歌の独自性を遺憾なく示す……」

と述べてをられる。

「東方の歌謠」三四頁、
「文学」昭和四〇年二月号

と述べてをられる。

○新膚

新膚あらわ（歌は前項I Jに既掲、14の三五三七）
私注にいふやうに、「農耕者の感覚を、或る程度見ることが出来る」（十四の二）ものであらう。幾分粗野な感覚で前述の「寝る」（三三頁）といふ性愛表現に通ふものがあるといへる。

○麥

麥あわ（歌は前項I Jに既掲、14の三五三七）
小馬こま（歌は前項Iに既掲、14の三五三七）

「麥」は他に卷十二の三〇九六（J参照）に一例あるのみ。作者未詳歌の卷に於いてのみ歌語となつてゐる。そして「麥」は前項I Jに掲げた如くいづれも「小馬」「駒」の語を伴つてゐることに注意したい。「小馬」は孤語。そして「萬葉集において『駒』は甚だしい東国語なのであり、王朝和歌はこれを雅語として伝統をついだのである。」（中西氏前掲）

○山澤人

山澤人やまざわびと（論文三九頁）
あしひきの山澤人の人多にまなといふ児があやに可奈思佐な（四六二）

「まなご」としてはあるが「まな」は孤語。猶、「まな」について、

「マナは、禁止、制止の語。……言い寄つてはいけないの意。従来マナゴ（愛子）のマナとされていたが、そのマナだけで使用された例はない。しかし愛子のマナも、もとは制止のマナと同語だろう。」（全註釈十の三）

○くずはがた

くずはがたくずはがた（四三）
上毛野久路保ねほの樹ねほの久受葉くすはがた可奈師家な兒こらにいやさ離さり來も（14の三）
も（四一二）

○葛葉の蔓

○浜渚鳥

葛葉くずはの蔓つたであるが、この形では孤語。
浜渚鳥なみさづとり（14の三）
人の児この可奈思家な時ときはは浜渚鳥なみさづとり足あ心こむな駒この惜あしけくもなし（五三三）
もなし

○渚鳥

○苗代

渚鳥なみさづとりは数例あるが、この形では孤語。

苗代の子水葱が花を衣に摺り馴るるまにまに何か加奈思家
(14の三) (五七六)

○にへす

鳩鳥の葛飾早稲を變すともその可奈之伎を外に立てめやも
(14の三) (三八六)

○たぐ(歌は前項Dに既)

そしてこのほか、「よだち」(14の三) (四八〇) 「くへ」(14の三) (五三七) 「枕
刀」(20の四) 等をあげることが出来る。それぞれ東国の風土や社
会を背負って歌語となつてゐるといへると思ふのであるが、次にこ
れらあげて来た孤語が多く譬喩或いは序詞の部分にあることは注意
してよいと思ふ。

序詞を用ゐたもの十首あるが、うち五首は孤語を使って発想され
てゐる。即ち、「くずはがた」は句をへだてて「離り」の序となつて
をり、

あしひきの山澤人の人さはにまなといふ子が……(14の三) (四六二)
柵越しに麥はむ小馬のはつはつに……(14の三) (五三七)

等、このほか卷十四の三五三七或本歌、三五七六がある。そして、
紫草は根をかも竟ふる人の児の宇良我奈之家を寢を竟へなくに
(14の三) (五〇〇)

この序詞には孤語はないのであるが、既述の如く「かなし」と「寢」
の結びつきはやはり東歌の世界でなくてはならぬと思ふ。

「ムラサキは根を終へるのに、私は寢を終へることが出来ない

といふ、極めて卑近な対比を用ゐた民謡……」(十四の一) (一九七頁)
といふ私注の「作意」の項は、この点に注意したものと理解出来る
と思ふ。

譬喩については、

鳴瀬ろに木屑の寄すなすいとのきて可奈之伎背ろが吾がり通は
む(14の三) (五四九)

相模路の湖綾の浜の真砂なす児らは可奈之久思はるかも
(14の三) (三七二)

前者孤語を持つ。「木屑」も亦東国の民謡らしい情調を醸し出して
ゐる。後者「子」をいふのに「砂」を譬喩に用ゐてゐるものには、この
ほか卷七の一三九二の作歌未詳歌があるくらいである。そして全註
釈は、「京人が相模の国の磯辺を旅行しての作らしい。」(十の二)
とされ、私注は、

「公路が浜近くを過ぎてゐたので、ヨロギの濱のマナゴは人目
に立ち、此の民謡が成立したのであらう。地形によって、今も
其のことは明かである。」(十四の二) (四二頁)

とある。私注によれば、この譬喩そのものに民謡としての意義を認
めてをられる。この譬喩は東国の風土に育つたものであるといふこ
とが出来ると思ふのである。

あらまし東歌の風土性を主張する孤語が、多く譬喩や序詞の部分
にみられることを例に即して述べて来たのであったが、序詞や譬喩
表現は、その発想の根柢に享受者と共有するものがある、いひかへ
れば、民謡性を著しく帯びてゐると考へられるこれらの序詞や譬喩
は、その発想を共有する風土と社会に於いて発生したものとといふこ

とが出来ると思ふ。かうみれば、孤語は類歌性の中であつてその風土性を強く主張するものであるといふことが出来るであらう。そしてその「かなし」は、かうした風土・社会に醸成されたものといふことが出来ると思ふのである。

以上は東歌の「かなし」について概観して来たのであるが、先づ「かなし」の持つ概念性をいひ、そしてそれが類歌性に深く関はつてゐることを指摘し、次は孤語をとりあげ、これら「かなし」が東國的風土性を強く背負ふところの民謡圏にあることについてふれて来たのであるが、如上のやうにみて来ると、東歌に於ける「かなし」は、その他の「かなし」が自悲の「かなし」として個性をそれぞれ主張してゐるものに相対立する民謡的東國的風土性に於いてのみ表はれるところの、他愛の「かなし」として、萬葉集に於いて際立つた独自性を有してゐるといふことが出来ると思ふのである。

注1 例へば、卷十四の三四〇三や三五五六の「かなし」は、

注釈書により「悲し」と「愛し」の違いがある。しかし三四〇三については本文に述べるやうに、自己の心中に於いてとらへられたものとして「悲し」と理解する。又三五五六は、注釈に、「女に手を触れないで、そのままにおいておけば」(十四の二五三頁)とあるのに従ひ、他愛とみる。

注2 防人歌の三首は個人的発想に通ふものがあり、むしろ東歌の世界から離れた、即ちその他の「かなし」の世界に近いといふことが出来る。これに対し三四〇三は、「悲し」ではあるが民謡の世界のものであり、このやうにみれば、東歌中唯一の「悲し」である。

(附記) 以上、東歌に於ける「かなし」として東歌・防人歌を一つにして概観して来たのであるが、「かなし」に關する限り、防人歌のそれは、卷十四の東歌の範疇に入りきれぬものを含んでゐるやうである。この事は逆に、卷十四の東歌の「かなし」が民謡の世界にあることを示してくれるのではあるまいか。

(四〇・三・三一稿、一〇・一八清記)

——宇部短期大学講師——